

# 金沢大学日本語学日本文学研究室所在古典籍目録稿

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 一戸, 渉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/35093">http://hdl.handle.net/2297/35093</a>

# 金沢大学日本語学日本文学研究室所在古典籍目録稿

一 戸 涉

はじめに

本稿は、金沢大学日本語学日本文学研究室（以下、本研究室）の書架にその存在を確認し得た古典籍総計二十五点の目録稿である。稿者が本学に教員として着任したのは平成二十二年十月のことであったが、その時以来、本研究室の書架に置かれたこれらの古典籍が、未だ目録公開がなされておらず、その多くが『国書総目録』（岩波書店）及びその後継にあたる国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにも著録されていないことを常々気掛かりに思っていた。数量としてさほど多いものではないため、爾来、折を見て整理を試みてきたが、この度、作業に一定の目的が立ったことから、「目録稿」としてここに公表することとした。加えて、当該古典籍群の現況についての概略を記し、主要な書目の解題を付した。なお目録の作成にあたっては平成二十三年度後期に開講した授業「日本古典学演習」「中世・近世文学講読B」の受講生である以下の学類

生・大学院生諸氏の協力を得た。ここに記して、謝意を申し述べたい。

丸井貴史・田中利枝・村谷佳奈・越智ちづる・吉村直哉・黒田佳奈・佐渡昌子・上野和美・大西未織・堀詩美美・前田彩伽（順不同・敬称略）

## 一、当該古典籍の現況

まず、これら本研究室の書架に備わる古典籍資料の現況について述べておかねばならない。それは、本稿の標題を「所蔵古典籍目録」ではなく「所在古典籍目録」としたことも関わっている。

ここに目録化を試みた本研究室の現蔵古典籍の大半には、既に日本十進分類法に基づく整理番号が付されている。よってこれらの資料が納入された際には、恐らく本学の中央図書館の側で既に一定の整理が行われていたものと思しい。だが、稿者が確認できた限り、本研究室においてかつて制作されたカード目録などにこれらの古典

籍資料は一切著録されていない様である。また現時点では本学図書館のOPACにも登録されていない。なお、現在各資料に付されている整理番号は巻数順に番号が振られていないものや、欠巻がないにも関わらず番号が途中で飛んでいるものがあるなど、種々の問題があることを言い添えておく。

こうした現状を鑑みて、今回、本研究室の古典籍をこのような形で目録化し公開することには一定の意義を有するものと考ええる。ただし、注意を要する点も少なくない。

本研究室に所在するこれらの古典籍群の総体を、その特性から分類してみるならば、おおむね以下ようになるだろう。

- ① 歴代の本学教員の公費による購入図書
- ② 金沢高等師範学校旧蔵本
- ③ 大津有一先生寄贈本
- ④ 川口久雄先生旧蔵本

①については、贅言は不要であろう。②に関しては、『絵入源氏物語』『偽紫田舎源氏』『菅家文章』『乾隆欽定四庫全書総目』『白氏文集』の総計五点が確認できる。金沢高等師範学校旧蔵本は本学中央図書館に一括して排架されているが(但し現時点では未整理)、これらの五点が中央図書館所蔵本とどのような関係にあるのかなどについては未詳である。③はかつて本学で教鞭を執られた大津有一先生の寄贈本で、『帯木別注』『岷江入楚』『源氏和秘抄』の三点が確認できる。各々の内容については次節を参照されたいが、大津先生が執筆を担当された池田亀鑑編『源氏物語事典』(東京堂、一九六〇)注釈書解題にこれらの資料が「金沢大学図書館蔵本」と

して言及されていることから、当該事典の執筆のためあつて収集したものであろうか。④であるが、こちらもかつて本学の教員を務めておられた川口久雄先生の旧蔵本である。確認できたのは『干禄字書』の一点のみ。こちらも内容に関しては次節を参照願いたい。

ところで、この四つの分類に入らない古典籍も存在している。『統藤栗毛』の一点のみであるが、当該図書には整理番号が付されておらず、本学の所蔵図書であることを示す印記も備わらない。実は先に④として掲げた『干禄字書』も同様であつて、こちらにも整理番号や本学の蔵書印等は確認できない。

この二点の古典籍がどういった経緯で現在、本研究室の書架に置かれているのかは、遺憾ながら不明とするほかない。また②に関しても、中央図書館蔵のものとの関係が不明瞭であるため、今後の取り扱いには注意を要する可能性もある。関係者の証言によれば、平成元年の角間キャンパスへの移転以前からこれらの古典籍の多くが本研究室に存在していたとの由であるから、少なくとも近年になつてから本研究室に存在していた訳でないことは間違いないと思われる。

本稿の標題を「所蔵古典籍目録」ではなく、「所在古典籍目録」としたのは、叙上のごとく本学の「所蔵」とするには留保すべき資料がごく一部ながら含まれていることに鑑みてのものである。したがって、本目録に著録されているからといって、ここに目録化した古典籍、とりわけ整理番号が付されていない先掲の二点について、本学並びに本研究室が所有するものであると主張するものでは決していない。ことが権利関係に関わるものであるため、ここにかたく申

し添えておきたい。本稿はあくまで、現時点において本研究室内の書架に見出すことを得た古典籍の目録であるということをご理解賜れば幸いである。

本来、このような不十分な形で目録公開などすべきではないことは稿者も承知している。だが、これらの古典籍がこのまま学内外の閲覧者の利用に供されることもなく、死蔵されてゆくことに僅かばかりでも抗したいという、稿者のごく個人的な動機から、蛮勇を奮った次第である。万一、本目録の公開によって何らかの不利益が生じることがあったならば、その責は全て私個人が負うものであることを、ここに言い添えておきたい。

なお、今回整理を行うにあたり、これらの古典籍の多くについて、資料保存の観点から適宜厚紙製の簡易帙を付したことを断っておく。

## 二、主要書目解題

以下、主要な書目六点についての解題を行う。主な書誌事項については後掲の目録にも記しているため、一部重複する記述があることをあらかじめ断っておく。

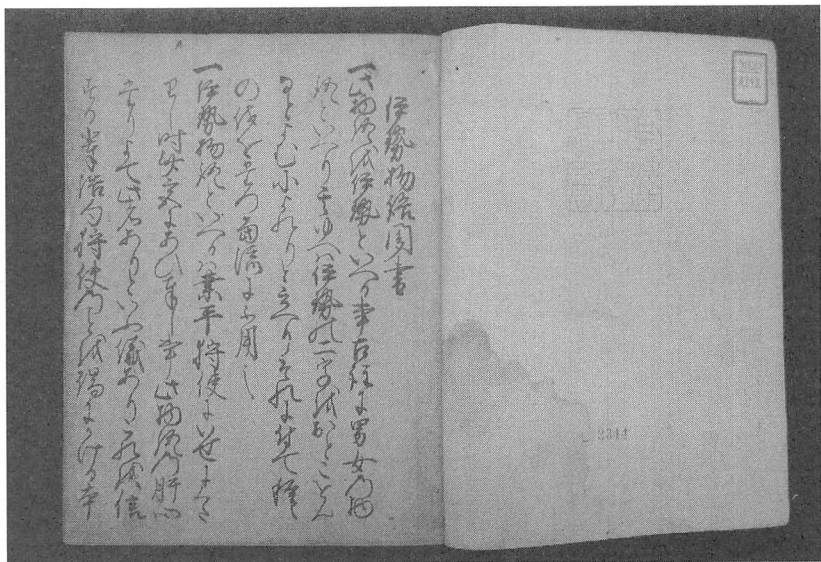
### ○『伊勢物語聞書』（半紙本一冊・写本）

本書は奥書に、

此一冊往年聴自然斎祇公

とあり、続いて、

此冊往年聴自然斎祇公説粗記之而連々談彼公令添削畢依友弘懇望所書写也



永正六年孟冬日夢老<sup>註</sup>

とある。前者の「自然齋祇公」は室町期の連歌師宗祇、後者の「夢庵」はその弟子の牡丹花肖柏。すなわち本書は、『国書総目録』において『伊勢物語肖聞抄』との統一書名で立項されている、宗祇の講義を肖柏が筆録した『伊勢物語』注釈書の一本である。大津有一『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』（八木書店、一九八六）二三七頁に「金沢大学法文学部国文学研究室蔵本」として言及されている文明十二年系統の一本とは本書を指す。『国書総目録』の『伊勢物語肖聞抄』項に「金沢大（一冊）」とあるのも本書のことであろう。本書は改装本であり、もとは二冊本であったが、現状では一冊に合綴されている。また汚損の具合等から判断して、白茶地に金箔箔にて霞を描く表紙（見返は布目無地）は後補と見てよく、唐草紋捺付の裏表紙（見返は薄青地に金箔散し）の方は更に時代が下り、近世末頃に付されたものであろう。書写奥書を欠くため筆写者未詳ながら、料紙や墨の風合等から室町後期頃の古写本と判断される。ノドに丁付あり。每半丁九行。

○『伊勢物語聞書』（大本一冊・写本）

前掲『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』三七一頁に紹介されている「金沢大学国文学研究室蔵伊勢物語抄」が本書に該当する。「伊勢物語抄」とは外題に基づいた書名であるが、外題は本文とは別筆で、後補のものとも目されるため、ここでは内題に拠つて書名を「伊勢物語聞書」とした。本書については大津著に「三光院実枝の講釈の聞書を主にしてある」ものであるとの指摘があり、いくつかの内部部証も挙げられていて首肯される。ただし、これも大津著が述べ

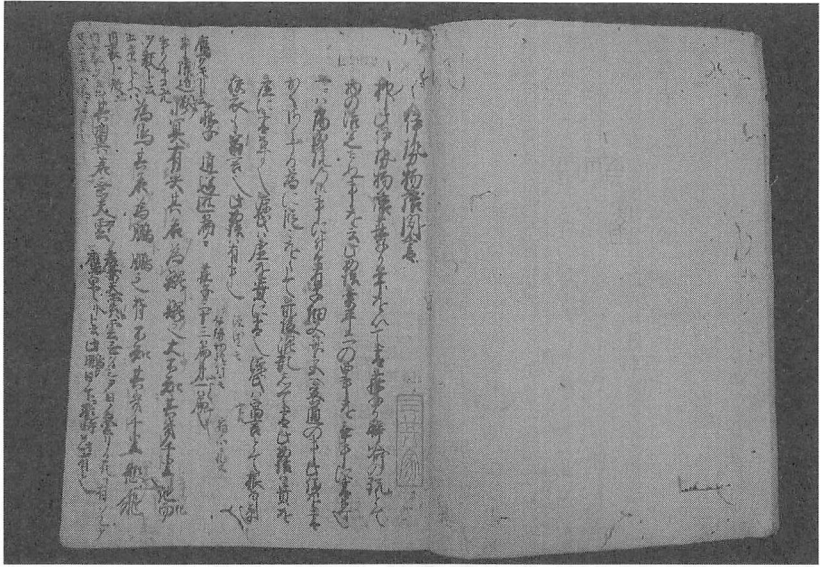
ることく、本書は奥書・識語の類を欠くため、実際にいつ誰が誰へ向けて講義を行った際の聞書かは不明である。大津著では百二十五段の注に「乍去隆昭へ三光講尺の時、此前の段思ひあまり出し玉のあるならん。此前二読入給也」とあることから、この「隆昭」なる人物の作かとしているが、原本を閲するに、この部分は「隆雅」と読むべきかと思われる。三条西実枝と接点を有していた人物では、飛鳥井雅敦（法号隆雅）が管見に及んだが、該書は彼の没した天正六年（一五七八）以前に書写されたものとは見做し難い。なお存疑としておく。

三条西実枝による『伊勢物語』講義に関しては、後水尾院の明暦二年の講義の飛鳥井雅章による聞書である『後水尾院御講釈伊勢物語抄』に、

東野州は大方の人には古注を先よまれたる也。又執心もあり、よき弟子には本式よまれしと也。追遙院、称名院、三光院等も古注を交てよまれし也。其後心をも見定ては本説をよみきかされし也。されども不謂事なれば其後一向不用事になれり。（藤島綾「三条西家流『伊勢物語』注釈の一形態―支子文庫本をめぐって―」（『語文研究』第八三号、一九九七）の引く九州大学附属図書館蔵本による）

とあり、三条西家流の講釈は当初、作中人物に具体的な人名を当て嵌める「古注」に基づいて行われ、一定の学習上の階梯を経た上でその執心ぶりに応じて、本説を教授するものであったという。とすれば本書における六〇段の注で、

愚見に或説小野小町大江惟章か妻になりて筑前へ下けるか後に



尼になりて近江に開(ママ「関」カ)寺のあたりに有けるを山に入と云り、当流に不用。

と一条兼良『伊勢物語愚見抄』が「或説」として引く小野小町に付会したような説は採用しないという「当流」とは、恐らく三条西家流を指すと見るべきか。ちなみに三条西実枝の筆写本である國學院大學附属図書館蔵『いせもの語』(同館デジタルライブラリーにて披見)の当該段では、ことごとく小町に附会した古注に基づく解釈が傍注の形で施されている。

本書は朱筆・墨筆による訂正や挿入符の類が夥しく、講義記録者による自筆草稿の趣を持つ。末尾十丁半にわたって墨付がないのも、恐らく事前に仮綴じ製本した上で講義に臨んだために生じたものかと思しい。いずれにせよ、本書は三条西家流『伊勢物語』講釈の末端に位置する資料として注意すべきものである。内曇表紙。印記のうち「三井家」印は三井高辰、「双籠監蔵」印は三井高堅所用のもので、本書は三井家旧蔵ということになる(渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』青雲堂書店、二〇〇一、参照)。

○『帯木別注』(半紙本一冊・写本)

大津有一先生寄贈本。別名『雨夜談抄』ともいう。室町期の連歌師宗祇による『源氏物語』帯木における雨夜の品定めに関する注釈書。本書は奥書に、

本奥書自筆也

文明十七のとし尼女子のためにしるしをき侍る物なり 宗祇

との宗祇による本奥書に続いて、

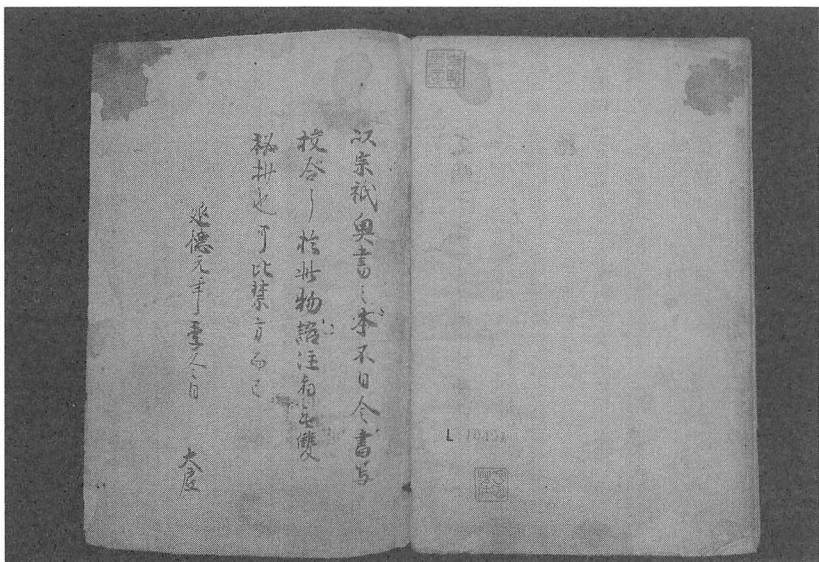
以宗祇奥書之本不日令書写校合了於此物語注者無雙秘抄也可比  
禁方而已

延徳元年季冬日 大虚

との奥書を有する点が注意される。宗祇自筆本に基づいて写本を製作していることから、「大虚」とは室町期の公卿三条公敦の道号と見てよい。すなわち、池田亀鑑編『源氏物語事典』（前掲諸）注釈書解題の「雨夜談抄」項（大津有一執筆）に、「金沢大学図書館蔵本」として言及されているのが本書に他ならない（同事典に三条公敦奥書の図版掲載）。装訂は列帳綴で、紙質・筆蹟ともに室町後期の写本の趣を有しているものの、本書が三条公敦筆であるか否かの判断はここでは留保しておき、図版を示して大方の御示教を仰ぐこととしたい。公敦は文明十一年より大内政弘の庇護のもとに周防に下り、翌年には同所に宗祇も赴いている（井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』・同『中世歌壇史の研究 室町後期（参照）』。この書写も公敦の周防山口滞在中に行われたものであろう。每半丁九行。共紙表紙。「青谿書屋」印より大島雅太郎旧蔵本で、「月明荘」印より反町弘文荘の扱った古典籍と知られる。事実、『弘文荘待賈古書目』第八号（一九三六）掲載の「<sup>讀</sup>帯木別注 宗祇著 延徳元年古写本」（掲載番号二二〇）は本書と見て相違ない。

○『岷江入楚』（特大本一冊・写本）

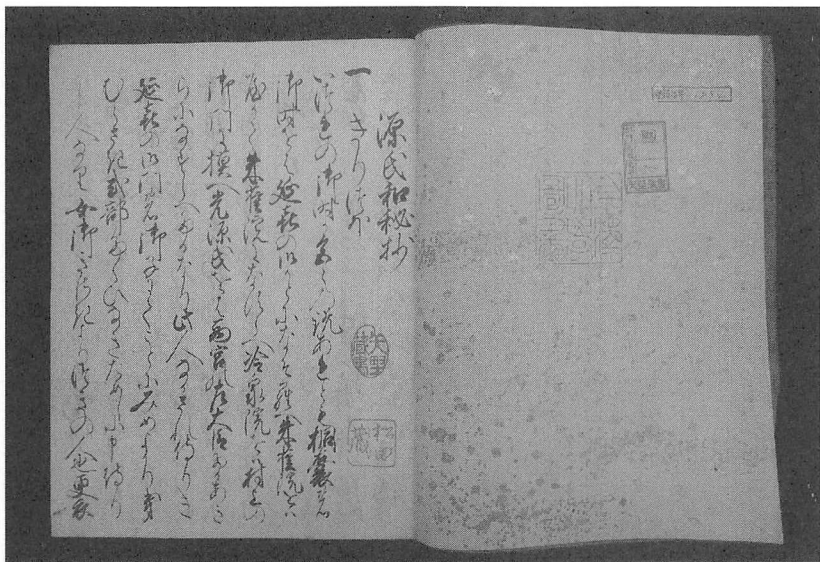
大津有一先生寄贈本。本書には外題・内題が備わらず、近代後補の帙に「<sup>讀</sup>帯木別注 宗祇法師著」と外題が墨書されている。だが、これは適切な書題とは言い難い。本書はその本文から判断して、戦国期から近世初期の公卿中院通勝による『源氏物語』注釈書『岷江



「入楚」の帯木巻のみの零本と見るべきものである。毎半丁一六行。書写奥書等は備わらないが近世中期頃の写本と目される。本書も先の『「帯木別注」』と同様、「月明荘」印から反町弘文荘の扱ったものと知られる。先の『「帯木別注」』と同趣の鈍浅緑色の布張表を用いる。『国書総目録』の「岷江入楚」項に「金沢大(二部)」とあるが、本学中央図書館には四高旧蔵書的一本(全五五冊・七門二四類一三〇号)が確認されるのみであることから、残りの一部とは本書のことかと思われる。池田亀鑑編『源氏物語事典』(前掲書)注釈書解題「岷江入楚」項に「金沢大学図書館蔵本」として言及されているのも本書であろう。

○『源氏和秘抄』(大本一冊・写本)

大津有一先生寄贈本。室町時代の公卿・和学者である一条兼良による『源氏物語』の語注書。雲立涌地に花紋の濃緑布表紙。見返は金箔散し。奥書・識語の類を一切欠くが、概ね近世中期頃の写本と見られる。なお本書に捺された蔵書印のうち「矢野蔵書」とあるものの印主は、九州大分の蔵書家矢野利雄か。本書にもまた「月明荘」印が確認され、『弘文荘待買古書目』第一四号(一九四〇)の掲載番号二三に「源氏和秘抄 上写本 一冊」とあるものが本書と見られる。なお、寄贈者の大津有一先生が本学に着任されたのは「大津有一博士略年譜」(『金沢大学国語国文』第三号・大津有一博士退官記念特輯、一九六七、所収)によれば昭和二十六年のことであるから、「昭和十五年五月二十一日受入」との識語は恐らく大津先生によるものであろう。池田亀鑑編『源氏物語事典』(前掲書)注釈書解題の「源氏和秘抄」項に、「金沢大学図書館蔵本」として言及さ



れているのも本書である（同事典に図版掲載）。

○干禄字書（大本一冊・刊本）

川口久雄先生旧蔵本。中国唐代の字書として知られる『干禄字書』の文化十四年の和刻本。『干禄字書』の版本自体は今日さほど珍しいものではない。だが、本書において注目すべきは朱筆による多数の書入れが施されている点、更に次の卷末識語を持つ点である。

朱書者寛延二己巳侍従菅公命副剛氏葛辰校本

文政三（ママ「四」カ）辛巳孟春下四屋代君見贈同夜以寛延刻

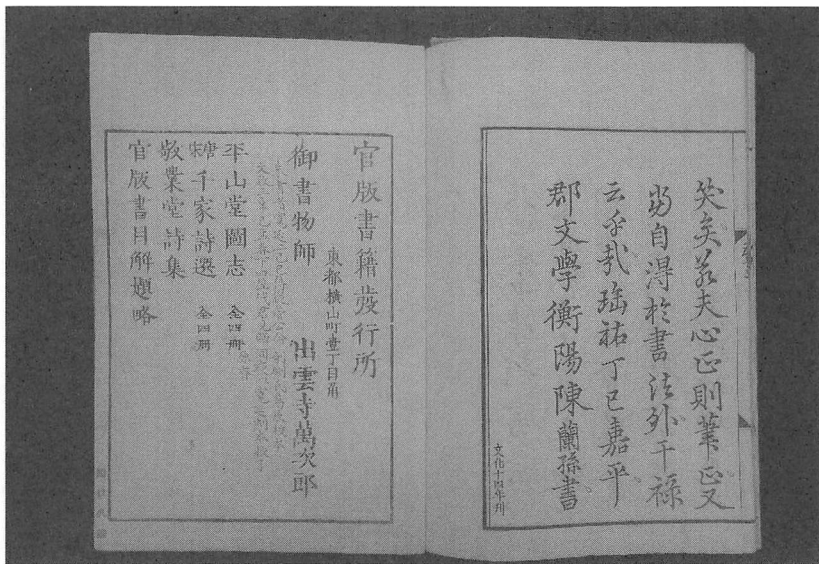
本校了

原眷

右の識語によれば、本書は「原眷」こと出雲松平家侍医の藍川慎が版本に種々校合注記を書き加えたものと知られる。筆蹟も藍川慎の自筆と見てよからう。当該識語で「寛延刻本」とあるのは松下烏石による寛延三年刊本と思しく、「屋代君」とあるのは屋代弘賢であらうから、藍川慎は弘賢から贈られたこの文化十四年刊本を用いて、寛延三年刊本との校合を行っていた訳である。なお、川口久雄旧蔵本は石川県立図書館に川口文庫として収められていることは周知の通りであるが、本書は何らかの理由でそこから洩れてしまったものであろうか。今後しかるべき形で処置がなされることを願いたい。注目すべき資料であるため、ここに解題を試みた次第である。

おわりに

以上、本研究室の書架に現時点まで確認することができた古典籍



の現況について述べ、また主要な書目について解題を行ってきた。総計二十五点の古典籍資料の目録は後に掲げた通りである。資料の整理自体は本稿において一応の区切りを迎えたわけであるが、今後、これらの古典籍が本学の学術資源として有効に活用されるよう、しかるべき処遇がなされてゆくことを望みたい。例えば、排架場所を替えるなどの処置を行った場合には、それがかつて当該目録に著録されたものであることを何らかの形で追跡できるようにするなどの配慮を願う次第である。持続的に蔵書を管理し、活用してゆくことは、大学という場における最も基礎的な営みの一つであると考える。本稿がその一助とでもなれば幸いである。

### 目録凡例

一、本目録に著録した古典籍の範囲は、便宜上、明治元年以前に書写・刊行された書物とした。ただし版木自体が明治以前に制作され、明治以降に刷られたものは著録し、『孝経伝説図解』も例外的に著録した。なお、教員の個人研究室に排架されている古典籍に関しては当該目録の採録範囲外である。

一、分類は『内閣文庫国書分類目録』に準拠したが、点数が少ないため独自に簡略化した。

一、書誌情報については、次の順に記述した。なお、該当する項目に関して記載すべき事柄がない場合は、その項目を省いて記述した。

整理書名 形態・巻数・冊数 刊・写の別

編著者名 別書名 刊写地刊写者 刊写年 寸法 装丁  
序跋 印記 刊記・奥書・識語 備考 整理番号

一、刊記に関しては主要な書肆名と刊年を略記した。ただし、識語・奥書など特筆すべきものについては全文を翻字した。

一、請求記号が付されていないものは、その旨を明記した。

一、整理書名は原則として内題に基づいて掲げ、内題を欠くものについては外題等を採用した。ただし後補の不適切な書名が帙や外題などに記載されている場合などは、稿者の判断に基づいて適切と思われる記事を「」に括って掲げた。また内題と異なる書名が外題などに備わる場合は適宜別書名項に示した。

一、編著者名や刊写年等の記載を欠くものについては、稿者の判断に基づいて適切な記事を「」に括って掲げた。

一、整理書名以外の書誌の記述においては割書・角書を「へ」で括って示した。

一、奥書等の翻字にあたっては、原則として通行の字体を用いた

### 目録

#### 【和書の部】

宗教—仏教宗派

秘蔵宝鑑鈔 大本三卷八冊 刊

〔宥快〕著 柱題・宝鑑(上・中・下)鈔 「近世前期」刊 縦二  
五・九×横一八・五 袋綴 印記「金沢大学図書」刊記なし  
書入あり 一八八・五／H六七六／V・一／八

文学・語学—物語・草子

伊勢物語聞書 半紙本一冊 写

宗祇 講・牡丹花肖柏聞書 外題…いせものかたり 「室町後期」

写 縦二二・五×横一七・七 糧 袋綴 印記「金沢大学図書」

奥書「此一冊往年聽自然齋祇公」「此冊往年聽自然齋祇公説粗記之而連々談彼公令添削畢依友弘懇望所書写也」永正六年孟冬日夢老／在判 九一三・三三二／B七四八

伊勢物語聞書 大本一冊 写

著者未詳 「近世前期」写 外題…伊勢物語抄 縦二七・五×横

二〇・一 糧 袋綴 印記「小天香堂所藏」「三井家」「双籠鑿藏」「大正十五年所販」「金沢大学図書」木製箱あり（伊勢物語古写）とある紙標貼付・近代後補力 九一三・三三二／I七八

伊勢物語闕疑抄 大本五卷一冊 刊

細川幽齋 著 内題…闕疑抄・柱題…闕疑（卷数）吉田屋権兵衛

（京）万治二年（一六五九）刊 縦二六・八×横一八・八 糧 袋綴 印記「金沢大学図書」書人あり 九一三・三三二／H八二七

〔繪入源氏物語〕 小本三〇冊 刊

〔紫式部〕著 「近世前期」刊 縦一五・五×横一〇・七 糧 袋綴

印記「武嶋」「金沢高等師範学校図書印」「金沢師範学校図書」他印文不詳の二顆あり 無刊記 昭和二四年に斎藤兼蔵を介して購入した旨の印記あり 金沢高等師範学校旧蔵本 九一三／五六〇

八五

〔帚木別注〕 半紙本一冊 写

宗祇 著 帙…源氏物語帚木別注延徳元年古写本 「室町後期」写

縦二三・四×横一五・四 糧 列帖装 印記「青谿書屋」「月明荘」「金沢大学図書」奥書「本奥書自筆也」文明十七のとし児女子のためにしるしをき侍る物なり／宗祇判」「以宗祇奥書之本不日令書写校合了於此物語注者無雙秘抄也可比禁方而已」延徳元年季冬日 大虚 帙に「大津有一寄贈」とあり 九一三・三六一／S六八二／一

〔岷江入楚〕 特大本一冊 写

〔中院通勝〕著 帙…帚木別注 「近世中期」写 縦二八・六×横

二三・〇 糧 袋綴 印記「中田氏蔵書印」「月明荘」「金沢大学図書」帚木巻の注一冊のみ存 帙に「大津有一寄贈」とあり 帙の外題に「宗祇法師著」とあり 九一三・三六一／S六八二

源氏和秘抄 大本一冊 写

〔一条兼良〕著 「近世中期」写 縦二五・〇×横二〇・〇 糧 袋綴

宝徳元年一月一日跋 印記「矢野蔵書」「矢野蔵書部 門 国文 番号 七〇〇」（七〇〇）は墨書「松田武市」「松田蔵」「月明荘」「金沢大学図書」帙に「源氏和秘抄 上写本」「大津有一 寄贈」「昭和十五年五月二十一日受入」とあり 九一三・三六一／I一六

文学・語学―小説・戯曲・戯文

統藤栗毛 中本六册 刊

十返舎一九著 外題…(岐蘇)統藤栗毛(初編)・内題…(金毘羅)／参詣)統藤栗毛(初編)・(木曾(岐蘇)／街道)統藤栗毛 紙屋利助(江戸)「近世後期」刊 縦一七・八×横一一・九 袋綴 文化七年春(初編)・文化九年春(三編)・無年記(四編)・文化十一年(五編)・文化十二年正月(六編)・文化十三年(七編) 自序 印記「北筑岡県藤木副田氏蔵書」「福田」刊記「本所相生町壹丁目 紙屋利助板」(初編・六編卷末) 自三編至七編のみ存 各編上下巻を合綴 整理番号なし

偽紫田舎源氏 小本一五册 刊

柳亭種彦著・歌川国貞画 柱題…源氏 鶴屋喜右衛門(江戸) 文政二二〜天保一三年刊 縦一六・九×横一一・五 袋綴 印記「金沢高等師範学校図書之印」 自初編至三八編のみ存 金沢高等師範学校旧蔵本 九二三／四一〜五五／六九四〇〜六九五四

文学・語学―文集・隨筆・雜考

徒然草諸抄大成 大本二〇卷一〇册 刊

浅香山井著 武村新兵衛(京)・吉田四郎右衛門(京)・谷口七左衛門(京)・田中庄兵衛(京) 貞享五年(一六八八)刊 縦二六・〇×横一八・八 袋綴 印記「金沢大学図書」「西村」他 印文不詳の一類あり 九一四・四五／A七九八／V・一〜一〇

文学・語学―和歌

万葉集燈 大本五卷五册 刊

富士谷御杖著 文政五年(一八二二)序刊 縦二五・七×横一八・一 袋綴 文政五年正月自序 印記「金沢大学図書」「西村」見返に「門人荒堀千秋校」とあり。 九一一・一二三／M 二八五／V・一〜五

百人一首拾穂抄 大本四卷四册 刊

北村季吟著 須原屋茂兵衛(江戸)・勝村治右衛門(京) 寛政六年(一七九四)刊 縦二五・四×横一九・一 袋綴 天和元年十一月冬至自跋 印記「釋氏證惠」「金沢大学図書」「西村」 書入あり 九一一・一四七／H九九二／V・一〜四

歌格類選 大本二册 刊

半井梧庵著 田中屋治助(京) 他八肆 嘉永五年(一八五二)刊 縦二六・〇×横一八・二 袋綴 嘉永四年六月大橋長広序・嘉永四年五月長沢伴雄序・嘉永四年六月香川景恒跋 印記「武藤元信」「金沢大学図書」「西村」 卷末に「梧庵大人著書目録」 半丁あり 九一一・一五／N一六三／V・一〜二

文学・語学―連歌・俳諧・歌謡

和漢朗詠集 大本二卷二册 刊

藤原公任編 外題…(真艸)和漢朗詠集・柱題…真草和漢朗詠集・見返題…(真艸／頭書)和漢朗詠集ひらかな附 柏原屋清右衛門

(大坂)・著屋宗八(京)天保六年(一八三五)刊 縦二五・三×横一八・〇糶 袋綴 印記「金沢大学図書」「西村」九一九・三／S五五五／V・一〇二

文学・語学―日本漢詩文

菅家文章 大本六冊 刊

菅原道真著 外題(改正)菅家文章 元禄一三年(一七〇〇) 跋刊 縦二六・〇×横一八・七糶 袋綴 寛文七年六月慮庵福春洞跋・元禄十三年秋中村願言跋 印記「宇治氏図書記」「金沢高等師範学校図書之印」「金沢高等師範学校図書」無刊記本 昭和二四年に沖森直三郎を介して購入した旨の印記あり 金沢高等師範学校旧蔵本 九二〇／一六〇二／K

文学・語学―語学

字音仮字用格 大本一冊 刊

本居宣長著 外題「字音かなつかひ」柱題「字音かな 柏屋兵助(伊勢) 他二肆 安永五年(一七七六)刊 縦二五・一×横一八・一 袋綴 安永四年三月須賀直見序・安永四年正月十日本居宣長自序 印記「金沢大学図書」「西村」他印文不詳の一類あり 奥付に岡田屋嘉七他八肆の名あり 八一・五六／M九一九

あゆひ抄 半紙本 六卷六冊 刊

富士谷成章著 吉川彦富・井上義胤録 山田屋卯兵衛(京) 他五肆 安永七年(一七七八)刊 縦二二・八×横一五・九 袋綴

安永二年六月吉川彦富・井上義胤識 印記「清直」「閑乃」「西村」「金沢大学図書」他印文不詳の一類あり 刊記に「北邊塾蔵版」とあり 卷末に「水玉堂蔵板和歌連俳書目 京都寺町五条下ル町 天王寺屋市郎兵衛」として「和歌夫木集」他三七点の広告あり 八一・七／F九六一／V・一〇六

歴史・伝記―伝記

名家略伝 大本四卷四冊 刊

山崎美成著 千賀春城校 河内屋藤史郎(京) 他一〇肆 「天保一二年」序跋刊 縦二五・〇×横一七・七糶 袋綴 天保二二年美成序・天保二二年原徳斎跋(逸斎書) 印記「金沢大学図書」「西村」二八一・〇八／M五二二／V・一〇四

地理・交通―名所図絵・案内・地図

国郡全国 大本二卷二冊 刊

青生東谿著 永楽屋東四郎(名古屋) 他五肆 天保八年(一八三七)刊 縦二六・〇×横一八・八 袋綴 享和三年九月菅原長親序・文政一二年仲秋泰鼎序(杉山廻書)・内田観斎序・文政一一年自序・「奥田」鳳文序・文政一二年長至日奥田叔建跋 印記「真珠廻屋」「芳□亭蔵」「金沢大学図書」二九一・〇三八／A六三八／V・一〇二

法制経済―儀式典礼

大日本年中行事大全 半紙本 六卷六冊 刊

速水春曉齋著・森川保之画 外題・見返題…(増補) 日本年中

行事大全・柱題…諸国年中行事 田中屋専助(京) 天保三年刊

縦二一・九×横一五・二 袋綴 東籬亭主人序 印記「金沢大学

図書」巻末に「集古妙蹟 五冊」以下八点の広告あり 内題の

角書 卷一・二・五は(当時/増補)、卷三・四・六は(新撰/

増補) W三八五・八/H四二二/V・一〜六

### 【漢籍の部】

#### 経部—孝経類

孝経伝説図解 大本二卷二冊 刊

金柘巖・載蓮洲著 梅溪書院(清) 同治一〇年(一八七二) 刊

縦二五・二×横一七・二 糶 袋綴 同治一〇年三月徐葆清序 印

記「金沢大学図書」「燕鳥軒」雲豫堂刊本の重刊本 一二三・七

／K七九／V一〜二

#### 経部—小学類—各禮字書之屬

干祿字書 大本一冊 刊

顔元孫編 外題…官□(破損) 干祿字書 出雲寺万次郎(江戸)

文化一四年刊 縦二五・九×横一八・一 糶 袋綴 宝祐五年陳蘭

孫(宋) 跋 印記「勿来関東北磬城鈴木氏収蔵図書印」「芝園蔵」

「川口」「川口文庫」「川口久雄」 識語「朱書者寛延二己巳待從菅

公命劄剛氏葛辰校本/文政三(ママ)「四」カ) 辛巳孟春下四屋代

君見贈同夜以寛延刻本校了/原脊「拜呈/桂城先生/明治三十

又一七月下浣/淡雨生」(見返) 藍川慎による朱筆校合書入あり

川口久雄先生旧蔵 整理番号なし

#### 史部—書目類

乾隆欽定四庫全書総目 半紙本四卷六冊 刊

外題・見返題・柱題…乾隆四庫総目 伏見屋宇兵衛(江戸)・和泉

屋庄治郎(江戸) 文化五年刊 縦二一・五×横一五・五 糶 袋綴

印記「山大□書画記」「金沢高等師範学校図書之印」「金沢高等師

範学校図書印」本文末に「文化二年刊」とあり 見返に「書房」

として「古香堂/慶元堂」の名あり 昭和二四年三月に沖森直三

郎を通じて購求した旨の記事あり 金沢高等師範学校旧蔵本 整

理番号の一欠はママ 〇二九/二〜七

#### 集部—別集類—唐五代之屬

白氏文集 大本七一卷二〇冊 刊

白居易著 内題…白氏長慶集・柱題…白集 出雲寺文治郎(京

都) 明治二八年補刻 縦二五・八×横一八・三 糶 袋綴 印記

「金沢高等師範学校図書之印」「金沢高等師範学校図書印」見返

に「明治二十八年三月補刻」とあり 巻末に「仏教書林発弘書林

/東京飯倉町/森江佐七/五丁目四十四番地」との印記あり 昭

和二四年に斎藤兼蔵を介して購入した旨の印記あり 金沢高等師

範学校旧蔵本 九二〇/一〜四〇、四五

【付記】 本稿は科学研究費補助金(若手研究B・研究課題番号二三  
七二〇一〇一)による成果の一部である。